

一橋大学 学長式辞より「時は逃げ去る。しかし、大学は永遠である。」

「これから生きる君たちへ」(新潮社)に、興味深い説話がありましたので、紹介します。

ヨーロッパでもっとも古い大学といわれるのはイタリアのボローニャ大学です。自然発生的なので具体的な創立年は不確かですが、通例は1088年と称されています。西ヨーロッパ全域が滅亡して以来ほぼ忘れ去られていた偉大なユスティニアヌス法典の最重要部分の講義をイルネリウスという人物が始めたのがこの年のことでした。その内容の素晴らしさを聞きつけてヨーロッパ全域から人々が集まりました。イルネリウスの私塾はまたたく間に大学へと発展していきました。やがて法学博士という学位もこの大学で出されるようになります。法学博士は世に尊重され、その学位は高い地位や収入を約束してくれるようになりました。つまり、専門的知識を武器として生きていく専門人がここに出現したわけです。身分ではなく、能力によって人が評価される近代へとつながる画期的な事件です。

興味深いことに、この中世のボローニャ大学には学則(1317/47年)といってよいものがありました。そこに「近代」を感じさせる興味深い記述があります。「われわれはボローニャ大学で学ぼうとする者の便宜を考慮し、毎年10月10日を始業日と定める。……

教授陣に講義の時間、時限、方法を示すことは有益なので、われわれは以下の点を確認する。……われわれは、教会法か市民法(ローマ法)の教授は誰であれ、サン・ピエトロ教会の鐘が第一時課〔午前六時〕を告げ終わるまでは午前の講義を始めぬように命ずる。教授は、その鐘が止むまでに教室かその近辺にいないといけない。鐘が鳴り止んだらただちに講義を開始せねばならない。違反の場合、罰金9ボローニャシリングを支払うべきこと。サン・ピエトロ教会の鐘が第三時課〔午前九時〕を告げ終わった後の講義の開始、継続、打ち切りはできない。…学生も全員ただちに退室せねばならない。違反の場合、該当者はそれぞれ10シリングの罰金を支払うべきこと。第九時課〔午後三時〕に講義を始める助教授は、サン・ピエトロ教会の第九時課の鐘が止んでからとする……」(アルノ・ボルスツ著/永野藤夫他訳『中世の巷にて』平凡社〔一部、修正〕)。

講義をしっかりと時計の時間通りに行うように定めています。内容に応じてそのたびごとに講義が長かったり短かったりするのではなく、きちんと時計の時間にあわせて内容を配分して、最後まで講義することが求められています。学則には「教授が講義をするにあたり、いかなる章、教命、法律、箇条といえども飛ばしてはならぬことを確認する」という項目もあります。新しい時代の学問を切り開き、その学問に基づいて専門的職業人を育てた大学は「中世のなかの近代」でした。近代社会は「自然の時間」ではなく、「時計の時間」が支配する社会です。一橋入学の図書館に「TEMPUS FUGIT」という額縁がおかれているのは、まさに大学にふさわしいもので、この言葉は、私たちに「近代の精神」をもち、「知を武器として世に出よ」、と伝えていると考えてください。

さて、私はこれに「入学は永遠である」という言葉を付け加えました。これは何を意味するのでしょうか。これを説明するために、もう一度、ボローニャ大学に戻しましょう。

さきほど紹介したボローニャ大学の学則は一橋大学のものと比べると随分違うという印象をもったことと思います。実は、ボローニャ入学の学則は大学が学生に対して示した規則ではありません。それは、大学つまり教員と学生との契約でした。ボローニャ大学の学生たちは自分たちの利益を守るために学生団という団体をつくり、その長である学頭(レクトル)が委員会を主宰して、先のような学則を作りました。このときの委員会の中には、ミラノの名門貴族ヴィスコンティ家に属する者もいました。「ヴェニスに死す」などで著名なイタリアの映画監督、ルキノ・ヴィスコンティはこの名門の子孫です。

学頭は学生の長とはいっても二十五歳以上で、聖職者という条件がありました。また、財力が求められていました。したがって、名門の出身者が学頭に選出されました。学頭は多大な権力をもち、学生だけでなく、教員にたいしても監督を行いました。教授たちは、先ほどの学則を守ることを学頭に対して誓約しました。学則は学生を縛るものではなく、むしろ教員を義務付けるものでした。……